

TAMAB

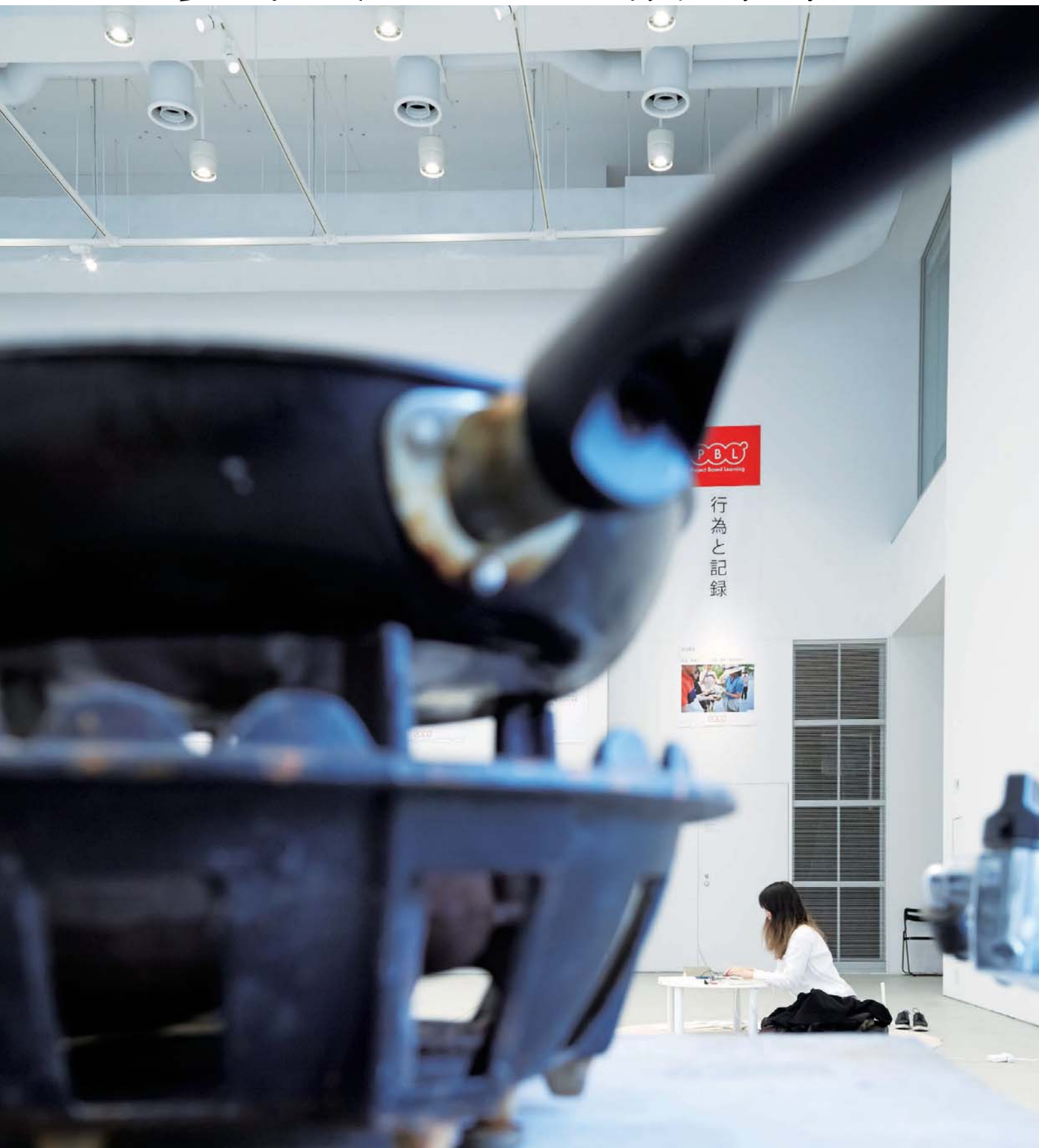
N E W S

73

2017

多摩美型PBLが描く未来

第2特集
イイ食堂



多摩美型 PBLが 描く未来

学科を超えて社会へ宇宙へ

学科や学年の枠を超えて、多様な知識やスキルの集まる授業がある。それが「多摩美のPBL (Project Based Learning) 科目」だ。PBL委員長を務める久保田教授に、その意義と魅力について聞いた。

インタビュー＝八木美貴



企画力と表現力で
地域を活性化



デザインの学生も
現代美術の世界へ



撮影＝山下加代

ファインアートの学生が
商品企画に挑戦



撮影＝山下加代

人道支援で
アートができること



久保田晃弘

(情報デザイン学科 教授／メディアセンター所長／PBL委員長)

1960年生まれ。多摩美術大学情報デザイン学科メディア芸術コース教授。メディア・アーティスト。数値流体力学、人工物工学(設計科学)に関する研究を経て、1998年から現職。PBLとしても取り組んだ、世界初の芸術衛星1号機「ARTSAT1: IN-VADER」でアルス・エレクトロニカ 2015 ハイブリッド・アート部門優秀賞をチーム受賞。「ARTSATプロジェクト」の成果に対し、第66回芸術選奨の文部科学大臣賞(メディア芸術部門)を受賞。(撮影＝山下加代)

1. 多摩美とPBL

自ら枠を飛び出して社会で “生き抜く力”を身につける

——多摩美におけるPBLで学ぶ魅力とは、どんなところにあるのでしょうか。

久保田 多摩美のPBLがもつ重要な側面のひとつが、**学科や学年の枠を超えてさまざまな技や知識をもった学生が交流できる**ことです。自分の学科の枠を飛び出して外に出ていくことができる。外に出ていくということは、マイノリティ(少数派)になるということです。マイノリティになることで、人はより考えるようになります。たとえば、日本人が日本で暮らしているかぎり、日本人であることの説明を求められることは、ほとんどありません。しかし、一度海外に出てみれば「なぜあなたはここへ来たのか」「あなたにとって日本とは何なのか」と、さまざまな人から問われます。スケールは違っても、PBLの授業では同じことが起こります。自分の制作や学科のことを紹介すると「なぜそんなことをやるの?」と問われ、相手にわかるように説明しようします。分野が違うということは言葉が通じない、つまり**共通言語がない、というところに気づくことが出発点**です。そのことは実社会でも同じです。

——社会に出れば、いろんな考え方や育ってきた環境の違う人たちがいますよね。

久保田 そんななかで生き抜いていく、ある種

のサバイバル能力を身につけることが、昔から大学の教育で求められてきたことだと思います。作家を育てて輩出するということも、つまりは**創作者という個人として、社会のなかでサバイバルしていく**、ということですね。今の時代、作家以外にもたくさんの選択肢があります。就職や起業だけでなく、発想やスキルがあれば個人に対して直接仕事が発注されますから、フリーランスでやっていくという道もある。そうした**多様なあり方を、大学側もどんどん支援していこう**、というわけです。PBLもそのひとつで、卒業後のサバイバル能力を鍛える場ともいえるでしょう。同じ考えの人が集まってもおもしろくない。**異なる意見や行動をする人が、相互にリズバクトし合いながら同居していけることが大切**です。だから聖徳太子も「和を以て貴しとなす」の前に、まず「異を以て貴しとなす」と言うべきだった(笑)。

美大生は群れてはいけない

——そもそも美大生であるという時点で、一般の大学生からしたら、ある意味少数派ですね。

久保田 そうですね。だからこそ、美大生は群れてはいけない。**美大の一番の特長は「あなた**

は何をやりたいのか」と問われ続ける場ということです。一人で多数の前に立つ講習会こそが、美大でもっとも重要な経験です。個人として自分の足で立つ、ということが、何かに取り組むときのベースになるわけですから。だから美大生には「思索する(答えのないことを考える続ける)」という資質がなくてははいけません。そのうえで「手に職」ということが初めて意味をもってきます。「知っている」「わかっている」を、「できる」「つくれる」で乗りこえていくためには、外に出ていくことに対する「恐れ」を克服しなければなりません。多摩美でPBLをやることの意義は、そのあたりにもあると思います。

——各学科の専門課程科目などのカリキュラムと、PBLとの違いはなんでしょうか。

久保田 各学科が育ててきた4年間かけてじっくり取り組む必修科目は、カリキュラムの大切な柱です。それらに加えて、PBLのように学期ごとに取り組めるダイナミズムも大事です。「必修じゃない」ことにもメリットがあります。「いつでもやめられる」という状態にしておくことで、**継続の意思をもったモチベーションの高い学生だけが残ります**。自らマイノリティになることで得られた経験は、卒業後にこそ生きてきます。

PBLは決して、正規のカリキュラムに取って替わったり、それを侵食するものではありません。たがいに補い合う存在にしていきたいと思っています。

学科や学年を超えた先に見えてくる新たな領域



撮影＝山下智代

—— PBLにはどんな目的がありますか。

久保田 PBLの目的は大きく分けて4つあります。1つ目に、**学内において学科や学年の枠を超えた交流ができること**。2つ目に、学内のみならず、**外部とのコラボレーションの機会をつくること**。3つ目はこれまで**各学科のなかにとどまっていた知識や技術、他学科に開放できること**。そして4つ目は、**どの学科にもおさまらない新しい領域にチャレンジできる実験場となること**。特に1つ目と3つ目の、学科や学年を超えた横断的な学びの場と、それを開放し共有するシステムは、PBL以前のカリキュラム構造にはほとんどありませんでした。もちろん、授業外のクラブ・サークル活動では他学科との交流もありましたが、そこで生まれていたダイナミズムを授業の場に取り入れていくことは、カリキュラムをデザインする側の僕らにとって、非常に重

要な挑戦でもあります。

—— どの学科にもおさまらない新しい領域というのは、どんなものでしょうか。

久保田 彫刻学科が提供している「行為と記録」がそのいい例です。パフォーマンスやハプニングといった表現形態は、今日の美術にとつて非常に重要なテーマであるにもかかわらず、どこかの学科に直接属しているわけではありませんし、そうするのがいいわけでもありません。一方で、どの学科にもパフォーマンスに興味のある学生は少なからずいる。PBLは、**そうした学生のニーズに応えたり、作品のクオリティを高めるための場所になり得ます**。これを通常の各学科のなかのカリキュラムで開講しても、パフォーマンスを支えるディスカッションの多様性が高まりません。**同質的な価値観のなかで高められることと、異質な価値観のなかで掘げら**

学生と教員が刺激を与え合い歴史は作られた



—— 開講されているPBL科目のなかで代表的なものについて教えてください。

久保田 「**バナナ・テキストスタイル**」は、前PBL委員長の橋本京子先生（テキストスタイルデザイン専攻）が長年にわたって取り組まれてきたもので、多摩美のPBLを特長づけてきた科目群です。内容としては、廃棄されるバナナの茎から繊維を抽出し、織布や紙などに再利用するという、環境問題とデザイン教育を兼ねたプログラムです。科目数が多く、産学共同の側面をもっているだけでなく、サステナブル（持続可能な）・デザイン、環境教育、横断的基礎の要素も、実験的な要素もある。対象とする問題の学際性や複合性といった意味からも、PBLの特長や意義を体現した授業といっているといいでしょう。

「**タマリバース**」は上野毛キャンパスの演劇舞踊デザインと、統合デザインというふたつの新学科が中心となって、それぞれの中心企画力と表現力を駆使しながら、地域を盛りあげている事例です。**ネスレ日本株式会社や日本赤十字社**と取り組んでいるPBLは、どちらも典型的な産学共同プロジェクトです。いずれも単発的なイベントではなく、長期にわたって信頼関係の構築が行われていることも重要です。グラフィックデザイン学科が提供する「**パッケージデ**

ザイン基礎」は、各学科のなかにあるスキルを開放する「**横断的基礎**」と呼ばれるカテゴリーの代表例です。制作資金を集めるためのクラウドファンディングや、3Dプリンターに代表されるようなパーソナルファブリケーションの普及によって、デザインしたものを個人が直接世に出していける時代。パッケージデザインはグラフィックだけでなく、クリエイター全般がかかわる基礎的なテーマにもなりました。他にも「**和紙、漉きの研究講座**」や「**パーソナル・パブリッシング**」、「**プレゼンテーション演習**」、「**3Dプリンティングデザイン**」などが、この横断的基礎のカテゴリーに入ります。

社会や地域への貢献、新領域への挑戦。美大の役割は多彩である

久保田 社会貢献、地域連携といったテーマにも、積極的に参画しています。2017年度の新しい取り組みとして僕が担当するのは、「**コミッション・ワークとしての映像制作**」です。相模原市からの依頼でスタートした官学連携プロジェクトで、2018年1月の**相模原市の成人式「はたちのつどい」で上映する映画を制作する、というプロジェクト**です。7000人の新成人の

れることは、ともに必要なものなんです。

単位が取得できる「公式科目」であることの重要性

—— PBLが開設される以前は、そういった新しいジャンルの活動や、マイノリティの学生がやりたいことをやれる場はあったのですか。

久保田 はい、おそらく教員個々人の裁量内で行っていたり、課外活動という形で実現していたと思います。多摩美という大学が大きくなったことで、それをシステムとしてカリキュラムに組み込んで、大学全体として正式に支援していく仕組みが必要不可欠になりました。大学が正式に支援する、ということは、**その成果に対して単位が出る**、ということに他なりません。公式の授業になれば、**大学の授業用の施設や機材を活用**できるので、メリットも大きい。もちろん開講時間の問題や、いかに学科固有の課題や制作とPBLを両立させるかなど、システム上の課題はまだたくさんあります。

約7割が出席するという大きな式典に向けたものですから、単におもしろいだけだったり、驚かすものはいけません。配慮すべき事柄もあります。相模原市の地域性や普遍性をリサーチし、ふさわしいテーマを設定する必要があります。多摩美には映像に特化した学科や専攻はありませんから、相模原市からの依頼があった際、横断的なPBLが多摩美の受け皿として最も適切だと思いました。

またPBLは新しいジャンルに取り組める実験の場としても活用できます。たとえば「**ART-SAT：衛星芸術プロジェクト**」と連動して、2011年から2015年まで開講した「世界初の芸術衛星（芸術探求のための人工衛星）」を打ち上げるプロジェクトがあります。その極めて専門的な内容がゆえに、アウトリーチ（社会への普及）を担うという重要な役割がありました。それは既存の芸術やデザインの枠組みのなかで質の高さをめざすのではなく、衛星を芸術に利用するプロセスのなかに、未知なる価値を発見する、という実験的な挑戦でした。新たなテーマに興味をもってもらうための入り口、そしてプロジェクトの裾野を広げるという意味でも、PBLの特長を生かすことができました。

やはり始めると「はまる」学生が多い

—— PBLを履修した学生たちの反応や変化を感じingことはありますか。

久保田 単純に「おもしろそう」という好奇心が履修の動機かと思いますが、やはりはじめると「はまる」学生が多いです。毎学期からずPBLを履修する学生もいて、**それまで交流のなかった他学科の学生と、主体的に行動をとるにして、切磋琢磨を**しはじめます。

PBLは学生だけでなく、僕ら教員にとっても気づきがあります。まず、他学科の学生を知る

桜になってはいけな“一斉に咲くな、絶対に散るな”



撮影＝山下智代

—— これからのPBLでの展開で、考えていらっしゃることはありますか。

久保田 **授業内容を事前に決めず、「学生が集まってから何をやるか決める」という方法の授業がやれるとおもしろい**と思っています。授業前はシラバスが白紙で、やりながらシラバスが書き上がっていくような感じ（笑）。シラバスが最終的な成果物になる授業、といってもいいでしょう。通常の授業はまずフレームを定め、そこに学生が入ってくるという形式ですが、逆に集まってくれた学生を見て、学生とディスカッションしながらフレームを決めていくという授業があってもいい。実験音楽や、実験映像のような、「実験」授業を行うためのシステムとしてPBLを活用することもできています。必修科目で実験することは、難しいというよりも、ある意味無責任になってしまう危険性がありますが、PBLという場をうまく使って、うまくいくかどうかかわからない「実験」に対する学生の反応を、**教員側もいろいろと試していければ、それこそ教員と学生が一体となった挑戦になり得ます**。大学には維持したり、保存したりしなければならぬこともあるけれど、うまくいくかどうかかわからないものにチャレンジすることで、失敗も含めた経験を通じて、新たな世界を開拓していくことも必要です。PBLで「**実験授業**」のみならず「**前衛授業**」と呼べるものも実践してみたいですね。

PBLを大学院レベルに高めた学際的なPBRの実現へ

久保田 もうひとつ、個人的にぜひ実現したいと思っているのは、学部の4年間、**特にPBL科目で身につけた横断性や学際性を総合して、大学院での研究や制作に昇華させていくための道筋をつくる**ことです。それはPBLならぬ、PBR（Project Based Research）と呼ぶべきシス

てができますし、科目によっては他学科の教員と一緒に授業を行います。学生だけでなく、教員もマイノリティになることが重要です。「なるほど、こう考えるのか」「こういうやり方もあるのか」と、僕自身、PBL科目は発見の連続です。**こうした気づきが大学全体に還元されて、多摩美全体の多様性につなが**ると思っています。

デムかもしれません。一般の大学であれば、研究というのは学会に所属して論文を書くことになりませんが、**美大における研究というのはもっと広い視野から、論文や学会という形式や枠組みを超えて、現状の延長線上にはない、実社会の変革につながる新しい意味や価値を発掘することだ**と思っています。PBLで培ったさまざまなノウハウを単に蓄積するだけでなく、学部から大学院へとつながる生きた研究として継続していけるエコシステム（生態系）をつくれるかどうか、が一番の課題です。さらにそのエコシステムを属人的なものにせず、教員や組織が変わっても動き続けるものにしなければなりません。やるべきことはまだ山ほどあります。

多摩美で学ぶ学生たちに今伝えたいこと

—— 最後に多摩美生へのメッセージをお願いします。

久保田 冒頭に述べたこととつながりますが、僕はつねづね学生に「**桜にだけはな**るな」と話しています。つまりは「**一斉に咲くな、絶対に散るな**」と（笑）。みんな一緒に咲いちやぐメなんです。隣が咲いても、自分は咲かない＝周囲に迎合せず、自主的にマイノリティになる。そして最後の1枚になっても決して散らない。何が何でもくっついて生き抜く＝サバイバルせよ、と。人が咲いている間は我慢して、人が咲くのをやめてから、ぽつと咲くほうがいじやないですか。そうすれば、桜も1年中咲き続けられる。桜と違って、日陰でも静かに咲き、白くて美しい花を咲かせ、匂いもあって個性的で、**煎じて飲めば健康**にもいいという「**ドクダミで花見**」のほうがずっと粋ですよな（笑）。とにかく散ったら最後です。これからの激動の世界のなか、みなさん**桜にだまされずに、必ずサバイバル**してください。

多摩美型PBLの現在地——

PBLは一般的に「プロジェクト・ベースド・ラーニング」と呼ばれ、基礎から積みあげていく従来型の授業ではなく、目標を先に設定して、提案や課題解決をしていく形式の授業を指す。「PBLが一般的になる前から、美大の授業はプロジェクト型が多かった。そうした蓄積に加えて、一般企業や自治体とのコラボレーションによる産学官共同研究にも約30年間にわたって取り組んできたことが、多摩美のPBLの背景にあります」と久保田教授。「最初は産学官共同研究のニーズや、国からの支援など、外的要因からはじまったのは事実です。ただし取り組んでいくうちに、多摩美としての固有の展開も見えてきました（久保田教授）」。学科や学年を超えての交流が課題となっていた教育現場において、そうした枠を取り払った交流が生まれ、各学科のなかで限定的に展開されていたカリキュラムを他学科に開き、新しい学びの場を与えている現在のPBL。どの学科にもおさまらない、新しいジャンルを見出す貴重な機会にもなっている。

これまでの歩み——

校名前の後ろは歴史学科・専攻を省す

「パッケージデザイン基礎」グラフィックデザイン①パッケージを、多様な機能をもつコミュニケーションツールとしてとらえ、デザインする際の発想力や造形力を培うことが目標。前編でスキルを中心に学び、後編ではギフトパッケージをテーマにした課題制作に取り組んだ。



撮影＝山下智代

「和紙、漉きの研究講座」日本画②日本の伝統的な素材のひとつである和紙の漉き身につけ、その紙を作品制作に生かすことを目的とした講座。



「パーソナル・パブリッシングⅡ フィジカル」情報デザイン②電子出版システムの普及によって個人的なものになりつつある出版。紙の物性などに注目し、書物としての情報のあり方や、個人で出版することの意味を考察した。



「パーソナル・パブリッシングⅡ デジタル」情報デザイン②（フィジカル）で考察した身体性をともに、デジタルメディアの特性を生かした表現を模索し、電子ポートフォリオなどに活用できる知識と技術の習得をめざした。



「3Dプリンティングデザイン」情報デザイン③3Dプリンティングの可能性について考察した。作成したCADデータから3Dプリントによる試作を繰り返して、新しい造形手法発見の機会を提供することも目的。



「ネスレの商品開発に伴うパッケージデザイン」グラフィックデザイン・プロダクトデザイン③ネスレ日本株式会社とパッケージデザインの共同開発。製品化された商品「キットカット パッカーナ」が、日本パッケージングコンテストで「社団法人 日本パッケージデザイン協会賞」を受賞。



「日常で命の意味を問うプロジェクト2016（日本赤十字社×多摩美術大学）」環境デザイン④人道支援に対して、アートやデザインにできることをテーマに、日本赤十字社と取り組んだ産学共同プロジェクト。2013年にグッドデザイン賞を受賞した。



「Fissler Japan 隣プロジェクト」環境デザイン④先進的なドイツの鍋メーカーであるFissler社の主力商品「プロ・コレクション」のさらなるブランド活性化のために何ができるのか、その方法と可能性について考察した。



「ARTSAT」情報デザイン⑤東京大学との共同で取り組んだ、衛星芸術プロジェクト。



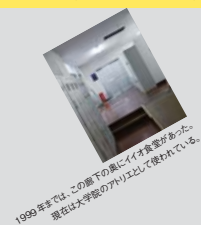
愛 さ れ て 半 世 紀 の 今 昔

イオ食堂の場所の変遷 ～本館地下時代から今～ 1971年 八王子キャンパス1期生が入学。同時期にイオ食堂が開設。場所は本館（現・共通教育センター）地下1階。 1981年 東学の前身の食堂、現在のイオ食堂の場所である新館（現・絵画棟）に開設。 1999年4月5日 イオ食堂が絵画棟棟に移設され、東学が完成したばかりのグリーンホールに移る。 2017年3月20日 イオ食堂がリニューアルオープン。

あのイオ食堂がリニューアルや展示会で話題

「ここが心のふるさと」という多摩美生も多いのではないのでしょうか。

イオ食堂は美術学部が八王子キャンパスへ移転を始めた1971年から同じ時を刻んできた老舗の学食であり、多摩美生の今と昔をつなぐ貴重な存在です。在学生はもちろん、卒業生も気になる、イオ食堂の話題を取材しました。

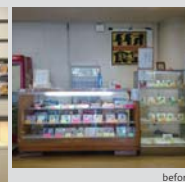


環境デザイン学科生有志の取り組みでリニューアルオープン

この春、八王子キャンパス絵画棟1階のイオ食堂が、リニューアルオープンしました。環境デザイン学科の岸本章教授が指導し、同学科の学生有志5名とともに実現したものです。テーマは「スペースの有効利用」。食堂内に点在していたデッドスペースはもちろん、注文動線の無駄にも着目し、メニューボード、食品受渡しカウンター、券売機のボタン表記にいたるまで見直しを図りました。そのすべてに、考え抜かれたアイデアが込められています。



メニューボードと券売機＝限られた空間でも、取扱いメニュー数を減らさない工夫が随所に。



before



券売機のボタン＝メニューボード、受け渡しカウンターの色とそろえた。

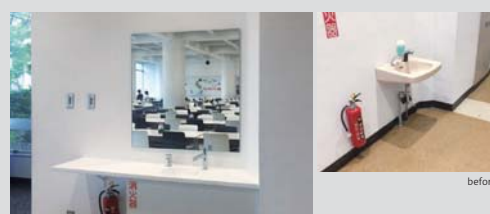
全メニューを学生が撮影。



ラウンジ＝無駄が多かった売店のスペースを見直しことで、座席数増を実現。居心地をよくした。



before



手洗い場＝機能性と清潔感が格段に上って、使いやすく。

上級生として、みんなのまとめ役 金崎由女さん（2017年卒）

「一番混んでいる時間帯の動線」などを調査し、問題点を徹底して話し合いました。途中からは卒業制作もあって携われなかったのですが、改修後の様子を見たとき、図面や模型を思い出してうれしくなりました。イオ食堂では窓を向いて座る席が好きです。今回は実現しませんでした。テラス席を設ける案もありました。いつか、天気の良い日は外でも食事できるようにしたいな、と思います。



両親とも多摩美出身、メニュー写真の撮影も担当 松井円味さん（4年）

イオ食堂は八王子キャンパスでできた当初から営業しており、新しいイオ食堂が受け入れられてもらえるか、正直不安でした。ですがそれも理解したうえで、より便利に使いやすく、みんなが親しみを覚えるようなイオ食堂を目指しました。自分の携わったものがそこに残り、後輩たちが使ってくれると思うと、幸せだったなと思います。



理想と現実に悩みつ、空間の効率化を追求 落合舞乃さん（4年）

什器をコンパクトに収め、効率的に空間を使うように再配置することを心がけました。できればテラス席の設置や残飯処理まわりも変えたかったのですが、予算や構造上の理由で変更ができず、残念でした。利用者（学生）の生の声が聞けたプロジェクトなので、「きれいになって良かった」と言う人もいれば、「さみしい」と改修前を懐かしむ人もいました。いろいろな意味で、設計やデザインの力を発揮することができました。



学生の意見をもっと採用したかった 大橋さなえさん（4年）

絵画棟につながるイオ食堂に行く廊下では、油絵の具の匂いがふわっとして「美大生なんだな」といつも肌で感じています。アンケートで集めた学生からの意見をすべて採用できなかったのは悔いですが、自分たちの使う空間をつくる機会はないので、多摩美にいた証を残せて幸せです。



プロジェクトの総括と今後 岸本章教授

3年次の課題でこれまでも何度かイオ食堂のリノベーションを取り上げていたのですが、今回それが実現できてよかったと思います。関わった学生たちにとっても、よい経験だったでしょう。これで一段落ですが、面積で大荷物の学生のために、机に荷物を引っかけるフックが付けられたらいいですね。まだまだアイデアは尽きませんよ。



イオとタマビの思い出

日本橋三越本店「E.O展」から



2017年3月8日～14日、日本橋三越本店本館6階美術特選画廊にて、世代とジャンルを超えた多摩美出身作家27名による「E.O展」が開催されました。この「E.O展」という名称は、まさに「イオ食堂」から名付けられたものです。

3月11日には、オープニングパーティーが開催され、藤谷宣人理事長、建畠哲学長、本江邦夫研究科長など多くの大学関係者もつめかけ、作家たちも学生当時の思い出話に花を咲かせました。また「E.O展」第2回の開催も決定しました。2018年4月4日～10日、今回と同じ日本橋三越本店本館6階美術特選画廊にて開催される予定です。

展覧会場には作家たちの「多摩美術大学での思い出やイオ食堂にまつわる思い出」のコメントも展示され、来場者の関心を集めていました。今回、三越の協力を得て、そのコメントのいくつかをご紹介します。

原 雅幸 (1979年 油画卒) #イイオ

思い返すと40年前、多摩美が八王子に移転したばかりで周囲には何も店がなかった頃、大学の中心に位置するイオ食堂は学生にとってオアシスであった。各科、各学年の学生と教官が和やかに集い、腹を空かせて貧乏学生を安くて美味しい定食で満たしてくれた。そこに行けばいつも誰かがいて、話も和み、打ち解け、出会いがあった。満腹と共にひとりひとりの心が満たされ、ひと時の安心に包まれた。今も絵を描きながら、その時々思い出の中にいる自分に気付く。

木嶋正吾 (1980年 院油画修了 | 絵画学科油画専攻教授) #イイオ

多摩美術大学は自由な校風で個性豊かな学生が集まっていた。友人と版画のサークルを立ち上げていて、よくイオ食堂に集まって語らっていた。カレーライスが特においしかったのを覚えている。大手のチェーン店とは違い家庭的な雰囲気があり、手作りの良さを感じていた。今もそれは変わっていないのではないだろうか。

塚本 聡 (1983年 院油画修了) #イイオ

多摩美への慣れない電車通学は苦痛であった。当時タバコを吸う習慣がない私には、1時間半の乗車後の25分間の禁煙漂うスクールバスは苦行だった。しかし食欲がないのに、カレーだけは不思議と食べられた。朝夕もあまり食べず、3ヶ月で10kg痩せたが、イオで友人と将来の夢を語り合いながら、徐々に体調も元に戻って行った。全く飽きせず、4年間カレーを食べ続け、身も心も支えてくれた場所が、イオであった。

百瀬智宏 (1984年 院油画修了) #イイオ

48年前入学し、丘の上ののどかなキャンパスで毎昼イオのカレーを食べ、友人達と絵を描く日々は楽しかった。ずっと描き続けられたらと思っていた。あの頃の未来に今なっているのだろうか。辛うじて描き続けてはいる。描き続けて来たことで社会と接点も持った。同時に背負うものも増えたがその分体力はついた気がする。その体力が自信になっていればいいのだが…。しかし気がつけば週替になっていた。

清水悦男 (1981年 院油画修了) #タマビ

芸大一本にしぼって三度失敗し、親に泣きつかれたあげくの多摩美受験。何とか合格して始まった大学生活四年間は、八王子の山の中という環境も手伝って、晴れた日などはユミンの歌に便乗し、橋本から相模線に乗って茅ヶ崎へ海を見に行ったり、今思えば、毎日がハイキング気分での連続だった。だが、その後おとずれの夢の実現には、充分すぎる程、濃密で、贅沢な時間でもあった。

武田州左 (1985年 日本画卒 | 絵画学科日本画専攻教授) #タマビ

当時は入学試験を世田谷の上野毛校舎で行っていた時代で、初めて鎌水の八王子キャンパスを目にした同級生の何人かが、「俺の田舎より山奥だ」と入学式で深いため息をついていたのを思い出す。見渡す限り森の海、空は何処までも青く視界を遮るものは確かに無かった。向いの丘の中腹にヤギか羊が放牧されていた気がするが、それは作られた記憶の幻か。門も無ければ扉も無い、24時間オールナイト芸術祭は、いつしか本当の幻に変わってしまった。



福井欧夏 (1993年 グラフィック卒) #イイオ

多摩美時代はほとんどバンド活動に明け暮れました。イオのカレーは金曜日が一番美味いらしいので金曜日に食べてましたね(一番煮込まれてるらしい)。おばけうどんの油あげは甘すぎた(笑)。一たぶん今はないと思いますが。朝のできたてサンドイッチは最高美味しかった(特にコロッケサンド)。



福井江太郎 (1994年 院日本画修了) #イイオ

私の大学生活は、演劇活動一色だった。学内に200人収容の仮設劇場を建設し、1000人以上の観客を動員する公演を年に数回開催した。1日のほとんどを学内で過ごしていた私たちの胃袋を満たしてくれたのは、何よりもイオだった。イオでカレーを食べながら、定食をつつきながら、友達に会い、打ち合わせをし、喧嘩をしたり、振られたりもした。もしくは無為な時間をも過ごしていた。今となってはあれが青春だったことを知る思い出の場所だ。

武藤博美 (1994年 院油画修了) #タマビ

当時の油画4年のアトリエはプレハブで、ドアも開けっぱなし。友人がどんな様子で作品と向き合っているのかよく分かった。私の他にも何人か学生のうちからコンクールや公募展に出品し始めていた。20代の頃の私は、無駄に悩み心が動きにくくなってがむしゃらに制作していた。好きなこと位は、当たり前のようにカタチにしたかったのだ。50歳目の今…、ようやく格好悪い自分を笑い飛ばせるようになってきたような気がする。

森 京子 (1994年 院油画修了) #タマビ

仲間と歩いた橋本駅までのちょっとしたハイキングコース。山中湖の多摩美の寮で酔っ払いながら星を見たこと。Mt.Fujiジャズフェスティバルに行ったこと。中国からの留学生の友人と一緒に行った中華街。泊まった宿の人に、以後多摩美出入り禁止と言われるほど騒いだ長崎旅行。卒業制作の合間に過ごした1号館学食での食事タイム。友人たちの影響もあり大学院に進んで絵と真剣に向かい合い始めた。多摩美の記憶はいつも人とともにある。

福井利佐 (1999年 グラフィック卒) #イイオ

特定のアトリエを持たないグラフィックデザイン学科は、学校に居残ることが少なく、唯一他の学科の学生さんと会えるのが食堂でした。2つある食堂でもイオ派の方は多く、私もその1人でした。メニューというサブとうどんの2つの麺の入った斬新なメニューに衝撃を受けたのを覚えています。どのメニューも家庭的で1人暮らしの私にとってはとてもおいしかったです。ボリュームのあるサラダだったので、それだけ食べていたら、心配したのか、他の学科の学生さんが後ろからおにぎりか何かを差し入れてくれたり、色々な思い出があります。すでに活躍されている先輩達がたむろっている場もあったり、とても刺激的で楽しい場でもありました。

今野尚行 (2000年 院油画修了) #イイオ

イオ食堂は美味しいとは言えない。何を食べるかいつも悩む。消去法でカレーが残り、食す。全然美味しくない。だがこの後10数年間このカレーを食べ続けた。理由は同じ、消去法。この間に途中で味が変わったことは一度も無い。しかしながら、8年目くらいから美味しいと感じた。ちょうどこの時期からメニュー全体の種類も増え、一見して美味しそうな料理も並び始めた。それでも、カレーを頼んだ。理由は美味しからだ。

藤田貴也 (2007年 院油画修了) #イイオ

美術の世界に飛び込んで右も左も分らないなか、そこはファインアート系の学生が多くツナギを着た絵具だらけの人、派手な服を着た奇抜な人やら変わった人たちと言ったら失礼かもしれないが、アートな人たちがたくさん利用する食堂と一緒に食事をしていとなんとなく自分も芸術家デビューしたような気になった。覚えてたての美術用語や現代作家を教え教えられたり、そんな語らいの場でもあったイオに久しぶりに行きたくなってきた。

TAMABI NEWSでは、今後も在学生と卒業生の「今」をつなぐ情報を発信していきたいと企画しています。食堂や売店、寮にまつわるエピソードや写真を、ぜひお寄せください。news@tamabi.ac.jp



情報デザイン卒業生の毛利悠子さんが 芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞



撮影＝松尾宇人

吉野もも個展 ‘Link’ 西武渋谷店全館で開催

4月11日～5月7日、12年油画卒業で同助手の吉野ももさんの個展‘Link’が、西武渋谷店全館を使って開催されました。視覚的な仕掛けを利用して絵画を空間に拡張させていく作品が、館内のいたるところで展開されました。B館8階オルタナティブスペースでは新作を含む‘Kami’シリーズの展示も行われ、西武渋谷店が吉野ワールドに染まりました。



文化庁がその年に優れた業績を上げた芸術家等の功績をたたえる「平成28年度（第67回）芸術選奨」のメディア芸術部門において、04年情報デザイン卒業の毛利悠子さんが文部科学大臣新人賞を受賞しました。東京での個展「Pleated Image」をはじめ、台北、ニューヨークでの個展、さらに8つのグループ展への招聘参加など、年間を通して卓越した活動が評価されていることです。また、贈賞理由ではメディアアートを背景にした独自の世界観と、作家自身のコミュニケーション能力は「これからの日本人アーティスト像を先取りするもの」として大きな期待が寄せられました。毛利さんは今後も「札幌国際芸術祭2017（8月5日～10月1日、北海道札幌市）」、「第14回リヨン・ビエンナーレ（9月20日～2018年1月7日、フランス）」への参加が決まっており、精力的な活動が続きます。

この度、このような素晴らしい賞をいただくことができとても嬉しく思っております。現在は日々作品制作をする環境があるのですが、実は卒業とともに、制作時間がなかなか取りにくい時期もありました。しかし一方で身の回りの小さなことでもインスピレーションに繋がっていれば、いつでも作品制作ができることも気づきました。このように、なにがアートになるのかわからない部分が最も興味深い仕事だと思っています。少しでも、みなさんに知っていただける機会をもつことができても光栄です。



毛利悠子「Pleated Image: Butterfly, 2016」 スキャナーを利用したインスタレーション作品。リボンや毛ばたき、ロープ、蝶のおもちゃといったオブジェの動きをスキャニングし、その画像データを次から次へとハードディスクに溜めていく。こうして生成されるさまざまな様相を、無数のひだがり重なり合う像＝「Pleated Image（ひだりのイメージ）」と名づけた。これまでに機械の誤作動（エラー）、あるいは自然現象に潜む「ぶれ」や「揺らぎ」に興味を持ち、目に見えない力を可視化する作品を制作している。

作品展示動画 (YouTube) "MAT Exhibition vol.1「THE BEGINNINGS(or Open-Ended)」Part2" / Minatomachi Art Table, Nagoya (MAT, Nagoya), 2016



話題のGINZA SIXに 卒業生2名の作品が登場

銀座6丁目にオープンした複合施設「GINZA SIX」のパブリックアートとして、85年油画卒業の堂本右美さんの作品が常設展示されています。森美術館の監修により、国内外で活躍する注目のアーティスト3名の一人に選ばれました。また、同館6階に入る「スターバックスコーヒー 銀座 萬屋書店」には12年大学院テキスタイルデザイン修了の小林万里子さんの作品が展示されています。



堂本右美「民」2017年 撮影＝加藤 健

受賞

写真は受賞および実演時のものです。

第58回（2016年度）毎日芸術賞 美術I部門
62年絵画科油画専攻卒業・河口龍夫さん ◎2016年秋に埼玉県・川口市立アートギャラリー・アトリアで開催された大規模な個展「河口龍夫－時間の位置」が高く評価。

2016年度朝日賞
辻惟雄名誉教授（元学長） ◎ 昨年春に東京都美術館で開催された「若冲展」の総監修を務め、「奇想の画家」の再評価など日本美術史への多大な貢献が評価。

第24回日本陶芸展
国内最大規模の陶芸公募展で大賞

大賞：工芸・井上雅之教授「NT-171」 ◎ 現代陶芸界の頂点を目指す「第24回日本陶芸展」は、重要無形文化財保持者（人間国宝）も輩出してきた、国内最大規模の公募展です。井上教授は現在第一線で活躍する陶芸家として招待されており、審査を通過した入選作品および招待作品から最も優れた作品として選ばれ、桂宮御杯が授与されました。4月～9月にかけて、全国4会場で巡回展示します。



第27回タカシマヤ美術賞
菊池寛実賞に続く快挙

02年大学院クラフトデザイン修了・留守玲さん「蟻や花か」 ◎ 熔接・熔断を用いた独自の手法と、鉄ならではの錆びるという特徴を取り込んだ〈さび〉の美意識が高く評価され、受賞しました。新鋭作家を助成する目的で、「タカシマヤ文化基金」から200万円が贈呈されました。

FACE展2017
902名からグランプリを含む4名の受賞

グランプリ＝10年大学院油画修了・青木恵美子さん「INFINITY Red」（写真） ◎ 優秀賞＝09年日本画卒業・杉田悠介さん「山」 ◎ 読売新聞社賞＝08年大学院油画修了・宮岡俊夫さん ◎ 審査員特別賞＝日本画4年・片野莉乃さん、11年油画卒業・浜口麻里奈さん ◎ 損保ジャパン美術財団の公益財団法人への移行を機に創設された同展は、「年齢・所属を問わず、真に力がある作品」をテーマにした、公募コンクール形式の展覧会です。902名の応募作品から、グランプリをはじめ4名が受賞しました。



第20回 岡本太郎現代芸術賞
岡本敏子賞＝11年彫刻卒業・井原宏路さん「cycling」（写真） ◎ 特別賞＝98年彫刻卒業・井上裕起さん「salamander[F1]」 ◎ 入選＝大学院日本画2年・奥村彰一さん、12年大学院油画修了・加藤真史さん、03年工芸卒業・福本歩さん。



2016年度 HALL OF FAME (ADC)
東京アートディレクターズクラブの2016年度名誉殿堂に中島祥文名誉教授が選出。これまでの顕著な功績と、アートディレクターを中心に約80名の会員で構成される同会において長年にわたり事務局長を務め、日本の広告・デザイン界への多大なる貢献を讃えられての「殿堂入り」。



触ってごらん、ウールだよ。

おいしい東北パッケージデザイン展2016

優秀賞（写真）および審査委員賞＝情報デザイン4年・釣瓶昂右さん「純つばき油」 ◎ 東北10商品の実用化・商品化を目指したパッケージデザインコンペで同時受賞。

奈良県景観デザイン賞2016

景観調和賞＝奈良古美術セミナーハウス（設計＝環境デザイン・岸本章教授） ◎ 奈良県の景観を魅力的にしている、過去3年以内に同県内に建った建築物・工作物を対象とする賞。



JAGDA賞2017

04年大学院工芸修了・えぐちりかさん「映像「春風のいたずら」」 ◎ 92年グラフィックデザイン卒業・屋山浩二さん「環境・空間「mt ex」」 ◎ グラフィックデザ

イン・服部一成教授「CI「POLA」」 ◎ 岡・葛西薫客員教授「複合「TORATA CAFE・AN STAND」」 ◎ 入選作品を収録した年鑑は2017年6月発行の予定。また、6月17日～8月6日に、東京ミッドタウン・デザインハブで年鑑作品展「日本のグラフィックデザイン2017」も開催。

新見市マスコットキャラクターに選出

統合デザイン3年・広瀬里菜さんがデザインしたキャラクター「にーみん」が、岡山県新見市マスコットキャラクターに選ばれました。



トピックス

給付型奨学金を拡充
2017年度より新たに給付型の「創立80周年記念奨学金」を新設します。この奨学金は学業成績が特に優秀な者を対象とし、約30名に年額30万円を給与します。

多摩美術大学創立80周年記念
奨学金募金のご報告
2015年7月から2016年11月まで募金活動をしてまいりました「多摩美術大学創立80周年記念奨学金」は、皆様から格別のご支援を賜り、総額85,792,460円に達しました。多くの個人様・法人様からのご理解、ご協力を賜り厚く御礼申し上げます。皆様からのご寄付は本学奨学金委員会を通して奨学事業に活用し、残高については「多摩美術大学創立80周年記念奨学金引当特定資産」として毎年度、計算書類の貸借対照表に記載いたします。

テレビ局3社が学内で仕事紹介を実施
NHK、TBS、テレビ朝日のテレビ局3社によるトークセッションが1月26日に八王子キャンパス・レクチャーホールにて行われました。各社が美術セットデザインに限らず局内外のデザイン事項を幅広く担当できる人材の確保を目的にしたもので、美術大学等出身のデザイナーによる実例を交えての仕事紹介をするなど学生の挑戦を促す内容となりました。また、デザイナー同士で意見交換を行う座談会のほか、就職に関わるお知らせや、学生とデザイナーが直接話せる懇親会も開かれ、参加学生にはテレビ局デザインセンターの仕事を理解するいい機会となりました。



高齢化社会に向けての産学共同研究
2月3日～12日にアーツ千代田3331で行われた「LIFE IS CREATIVE展」にプロダクトデザイン専攻(第2スタジオ)が参加しました。同専攻では、昨年よりNPO法人プラスアーツ、デザイン・クリエイティブセンター神戸、日本財団とともに「認知症とその周辺に向けたデザイン」「高齢化社会へ向けたデザイン」をテーマに共同研究を行ってきました。今回はその成果発表の展示のほか、参加学生による「高齢化社会に向けてのデザインアプローチ」としたプレゼンテーションなども行われました。



文化庁で学生作品を展示

3月9日より6月30日まで文化庁と全国芸術系大学コンソーシアムが連携して開催中の「Arts in Bunka-cho トキメキが、爆発だ」展に、本学から日本画4年・櫻井加奈子さんと大学院油画2年・畑山太志さんの2名が選抜されて出品しています。この展示は文化庁(旧文部省庁舎)を会場として行われており、若手アーティストの躍動するエネルギーを国内外へ発信することを目的に、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向け日本文化の魅力を伝える「beyond2020プログラム」の一環として開催されているものです。



NEXT 八王子織物プロジェクトtetote

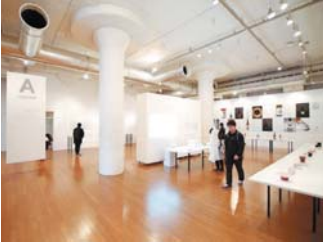
テキスタイルデザイン専攻と八王子織物工業組合の産学共同研究の成果を発表する展覧会が3月9日～15日に表参道ROCKETで開催されました。このプロジェクトは、かつて「桑の都」と呼ばれた八王子織物のさらなる発展を目指し2012年度から継続的に行われているもので、2014年度からは織物そのもののデザインから新製品を開発しています。2016年度は織物を学ぶ3年生20名が参加し、機(はた)屋6社と協働で立ち上げた架空の6つのブランドアイテムを展示、オリジナルのネクタイなども販売されました。



統合デザイン学科 第1期生 成果展「INTEGRATING」

統合デザイン初の学外展で3年間の 歩みを披露

3月11日～13日、横浜のBankART NYKにて開催され、専任教員による5つの「プロジェクト」と、9つの演習授業で制作した課題作品を中心に展示が行われました。教員と学生によるトークショーも開かれ、各プロジェクトのデザインに対する視点など、教員と生徒という関係だからこそ語られる内容が披露されました。従来のデザイン領域の区分を取り払い、デザインの諸領域を横断的に学ぶ新たな教育、「統合デザイン」という考え方に触れられる3日間となりました。



在学生が相模原市と壁画を製作

相模原市が落書き防止活動事業の一環とし行う壁画絵画製作において、その原画を油画4年・町田帆美さんが担当しました。これは昨年度締結した同市との包括連携協定に基づくもので、相模原塗装協同組合とNPO法人きりこととの協働によりJR橋本駅近所の「やすらぎの道立体」に3月21日に設置されました。



造形表現学部クロージングパーティー

2013年に学生募集を停止し、造形表現学部としては最後の学位授与式が3月25日に挙行されました。当日は上野毛キャンパス中庭を使って同学部前身の美術学部二部時代を含むOB・OG、元スタッフなど約700名が集まるクロージングパーティーも行われ、多くの卒業生たちが旧交を温めました。また、映像演劇・ほしのあきら教授と石田尚志准教授による和太鼓と書のライブパフォーマンスや、太田幸夫元デザイン学科教授による講演会なども開かれ盛会となりました。



メディアセンターのオープンスペースが拡充

八王子キャンパスメディアセンター2階の入り口付近に、学内のニュースや展示情報などを配信するデジタルサイネージが新たに設置されました。また、電源コンセントを備えたテーブルを新たに整備し、ノートPCなどを持ち込んだ作業ができるようになっています。この改修には環境デザイン・米谷ひろし教授とインテリアを専攻する大学院生が関わっており、名機バラゴンから流れるBGMを聞きながら、授業の合間などの時間を有効に活用できるスペースが出来あがりました。



タマグラアニメーション・シアター公開

過去数年にわたるグラフィックデザイン学科で制作されたアニメーションをYouTubeで閲覧できる「タマグラアニメーション・シアター」を公開しました。同学科は01年卒業でアカデミー賞にも輝いた加藤久仁生客員教授をはじめ国内外で数多くの受賞歴があり、日本のアニメーション教育で高い評価を受けています。またここ数年は、国立音楽大学の作曲専修の学生にオリジナル音楽の作曲をしてもらうコラボレーションも行っています。奇抜でポップでさまざまなスタイルがひしめきあう「タマグラアニメーション」をぜひご覧ください。
www.youtube.com/tamabi



上野毛でクラブ交流会を実施

4月24日に上野毛キャンパスで、八王子・上野毛両キャンパスの学生約180名が参加して「上野毛クラブ・サークル交流会」が行われました。この会は両キャンパスに統合デザイン学科と演劇舞踊デザイン学科が設置された2014年から始まり、今年で4回目を迎えます。各クラブ・サークルの代表による新人勧誘を目的としたプレゼンテーションのほか、立食パーティー形式で普段は離れて活動することも多いクラブ間の交流を図りました。



2017年度学事日程

4月	5日	入学式
	10日	前期授業開始
7月	15日	オープンキャンパス×進学相談会 2017 (八王子キャンパス 16日まで)
	24日	前期末試験 (29日まで)
	31日	集中講義・補講 (8月4日まで)
8月	4日	前期授業終了
	5日	夏季休業 (9月1日まで)
	9日	八王子キャンパス・上野毛キャンパス校舎閉鎖期間 (16日まで)
9月	2日	後期授業開始
11月	1日	創立記念日
	3日	芸術祭 (八王子キャンパス 5日まで)
12月	15日	補講 (21日まで 18日は平常授業)
	22日	冬季休業 (1月4日まで)
1月	15日	年度末考査 (20日まで)
	20日	後期授業終了
3月	7日	博士課程展 (多摩美術大学美術館 23日まで)
	21日	美術学部卒業制作・大学院修了制作展 (八王子キャンパス 23日まで)
	23日	学位授与式 (八王子キャンパス)

授業調整日については2012年度より単位制度の関わりから、必要な学修時間を確保するため、全ての曜日において半期15週、通年30週での授業日数を確保しています。2017年度は次のとおり休日に授業を行います。その一部を振り替えとして5月2日(火)、6日(土)に臨時休業日を設けました。

授業を行う祝日は4月29日(土) 昭和の日、9月18日(月) 敬老の日、9月23日(土) 秋分の日、10月9日(月) 体育の日、11月23日(木) 勤労感謝の日

研究活動

2017年度科学研究費助成事業 採択者

科学研究費助成事業は、人文・社会科学から自然科学まですべての分野にわたり、あらゆる学術研究を格段に発展させることを目的とする国の競争的研究資金であり、審査を経て、独創的・先駆的な研究に対する助成を行うものです。今年度の本学の採択者は以下のとおりです。

●基礎研究 (B) (一般)

楠房子 教授 (情報デザイン学科)
ユニバーサルデザインに基づいたデジタル人形劇の開発と実践

安藤礼二 教授 (芸術学科)
神智学運動とその汎アジア的文化接触の比較文学的研究—東西融和と民主主義の相克—

●基礎研究 (C) (一般)

久保田晃弘 教授 (情報デザイン学科)
軌道上展開構造物による衛星彫刻の実現

鶴岡真弓 教授 (芸術学科)
エルミタージュ美術館所蔵「黄金の鹿」の神話と造形表象—「生命再生の鹿角」の研究

平出隆 教授 (芸術学科)
河原温の秘匿された「生涯と制作」の解明

李里花 准教授 (共通教育)
米国マイノリティ問題の総合的研究：マイノリティ研究と環太平洋的視点のリンケージ

佐藤達郎 教授 (共通教育)
広告主側におけるクリエイティブ・マネジメントの国際比較研究

松田嘉子 教授 (共通教育)
アラブ古典音楽のタクシーム (即興演奏) におけるマカーム (旋法) の構造

高梨美穂 准教授 (共通教育)
直示動詞「行く」「来る」の母語習得に関する研究
深津裕子 教授 (共通教育)
西表島の衣文化資源を基盤としたサステナブルデザインとエコツーリズムへの展開

●挑戦的萌芽研究

野村辰寿 教授 (グラフィックデザイン学科)
アニメーション制作における制作環境と変化とその影響に関する調査研究

伊集院清一 教授 (共通教育)
芸術と芸術療法の他分野融合研究がもたらすもの

●特別研究員奨励費

久保田晃弘 教授 (情報デザイン学科)
メディア芸術理論構築のための基礎研究

菊田武彦 教授 (絵画学科油画専攻)
岩絵の具入門
～日本画の画材で自分の色を作ろう！～

深津裕子 教授 (共通教育)
アート&デザイン：
身近な素材を使って皆で織物体験
～未来へのメッセージを織り込めて～



本年のオープンキャンパスのヴィジュアルデザインを大貫卓也教授 (グラフィックデザイン学科) が担当しました。催し内容など詳細は、7月上旬に特設サイト上で公開予定です。

「ヴィジュアルデザイン」について 夢を見るのが簡単ではなくなった世の中で、学生たちの夢や希望をとびきり明るくハッピーに表現することが今回のテーマです。多摩美術大学の校訓はFREEDOM & WILL。自由と意力です。そこで本来はブルーの校章をレインボーカラーにデザインし、多様化する芸術文化、そして未来への希望をイメージさせた真夏のオープンキャンパスとして表現しました。常にフレッシュな多摩美術大学が新装OPENしたイメージでもあり、美 (多摩美の校章) の幕開けであることも意図しています。



人事異動

定年退職

2017年3月31日付で11名の方が定年退職されました。
長い間お世話になりました。

田中康夫 教授 造形表現学部 造形学科

松下宣康 教授 造形表現学部 造形学科

平成元年に着任し、いつの間にか28年の歳月が流れました。恩師、横山操・加山又造、両先生のご縁がありました。母校で仕事ができることは幸せな出発でした。学生の明るく純粋で渾剣した姿勢にどんなに支えられたことか。卒業生にはもう画家として活躍している人がいます。造形学科の誇りです。最後に今日まで勤務するにあたり常に温かく見守っていただいた方々に心より御礼を申し上げます。有難うございました。

小笠原登志子 教授 造形表現学部 デザイン学科

上野毛キャンパスに勤務してから28年が経ちました。在職中には、解決しなければならない問題にいくつもぶつかりましたが、二部事務部・造形表現学部事務部をはじめとする事務職のみさまの温かいご支援を得て、何とか無事に乗り越えることができました。この場を借りまして、厚く御礼を申し上げます。

石井茂 教授 造形表現学部 映像演劇学科

萩原朔美 教授 造形表現学部 映像演劇学科

散る花を追わず月の出を待ち続ける。そんな感じの三十数年間だった。才能という月を見たり見なかったりした。楽しい想い出しか浮かんで来ない。残念な事は一つだけ。「人は、他人に推挙されて就き、退く時は自ら決める」という在り方を実行しなかったことだ。もっと早く道を譲るべきだったかも知れない。何せ私の心は老化してくれない。自分が老人になったことに気が付かなかったのだ。長い間お付き合ひいただき、ありがとうございました。

星野章 教授 造形表現学部 映像演劇学科

多摩美の経験と包容力を今後へ

平成元年に上野毛の新学部専任講師として赴任して、今年3月に学部閉鎖と同時に退任と言う、なかなかできない経験をしました。お陰さまで後ろ髪を引かれることなく、今日そして明日に向かい合っています。何も取り柄の無い私が、曲がりなりにも教師として、そして映像作家としてやってこれたのは多摩美の包容力があつたからこそだと、しみじみと感謝の気持ちを心に留めております。作品制作と地域活動にこの気持ちと経験を生かして続けていこうと思っております。これからの多摩美の発展を願っております。ありがとうございました。さあ！

庄山晃 准教授 造形表現学部 映像演劇学科

檜山茂雄 准教授 造形表現学部 映像演劇学科

お世話になりました。これまで多くの学生と多くの思考とで“作る”ことに向けてきました。今後は身辺の整理の日々は別な切り口でくなくにか、面白いことを期待したい)日々をしたいと思っています。ついては、卒業生と学生の活躍・すてきな感性に期待しています。

神原秀治 参事 附属図書館事務部

総務部、図書館・美術館に勤めさせていただきしました。多摩美術大学のみな様のお役に立てたのか忸怩たるものがあります。12年の間、みな様から暖かいご指導、ご厚誼を賜り心から感謝申し上げます。多摩美術大学が輝かしいナンバーワンの美術大学であり続けることを祈念いたします。

田村勇二 参事 教務部国際交流室

私の生活空間は、ほとんどが八王子キャンパスでした。図書館での十数年、教務としてさらに数十年、学生の皆さんや先生方と共に過ごさせていただきました。教務部に来てからは、主に課程申請や留学生を相手とした国際交流の仕事に携わることになりました。今日の国際交流室ができたのは、2005年の事です。数校しかなかった海外協定校も2016年には、22大学を数えるまでになりました。思い出は尽きませんが、多摩美術大学で過ごさせていただいた年月は、私の人生のものといつていいと思います。ご支援いただいた先生方、職員の皆様、そして何より理解を示して頂いた理事長、この場をおかりして御礼を申し上げます。

長谷川弘二 技術職員 附属メディアセンター

退職

美術学部

佐東利穂子 准教授(演劇舞踊デザイン)
宮ヶ丁渡(日本画助手)
上野和也(油画助手)
石橋佑一郎(版画助手)
右田啓子(版画助手)
佐々木友二(彫刻助手)
原裕子(工芸助手)
原田要介(グラフィックデザイン助手)
高城光(グラフィックデザイン助手)
西澤亜純(プロダクトデザイン助手)
遠藤智子(テキスタイルデザイン助手)
小谷里奈(環境デザイン助手)
石山琢子(情報デザイン助手)
伊東友子(情報デザイン助手)
齊藤のはら(芸術助手)
菊池奈緒(総合教育助手)
青木香保里(日本画助手)
中内友紀恵(グラフィックデザイン助手)
石田弓恵(グラフィックデザイン助手)
加賀達也(グラフィックデザイン助手)
保田大介(プロダクトデザイン助手)
山中なみ子(テキスタイルデザイン助手)

松島奈々(環境デザイン助手)
大野将章(環境デザイン助手)
佐藤えりか(情報デザイン助手)
時里充(演劇舞踊デザイン助手)

大学院
高田佳奈(助手)

造形表現学部

砂川啓介(造形助手)
成澤響子(造形助手)
加藤正悟(造形助手)
辻ひろみ(デザイン助手)
大畑友則(デザイン助手)
松山立(映像演劇助手)
山口祐子(映像演劇助手)
井井晴幸(映像演劇助手)
川本直人(映像演劇助手)
平曜(映像演劇助手)
荒谷知恵子(デザイン助手)
新城宏明(デザイン助手)
荻野さつき(デザイン助手)
滝見社平(デザイン助手)

附属メディアセンター

中川朝子 常勤嘱託
(以上、2017年3月31日付)



新規採用

美術学部

大島成己 教授
絵画学科版画専攻



川口清勝 教授
グラフィック
デザイン学科



佐々木正人 教授
統合デザイン学科



山田菜々子 講師
生産デザイン学科
テキスタイル
デザイン専攻



糸井幸之介 講師
演劇舞踊
デザイン学科



加藤梨花 講師
演劇舞踊
デザイン学科



松本玲子(油画助手)
吉野もも(油画助手)
林朝子(版画助手)
渡部吉之(版画助手)
須佐美彩(彫刻助手)
藤澤英恵(彫刻助手)
林麻依子(工芸助手)
芝田美樹(工芸助手)
川村紗耶佳(プロダクトデザイン助手)
堀口淳史(情報デザイン助手)
坂本睦月(統合デザイン助手)
橋口美佐(統合デザイン助手)
丸井智史(演劇舞踊デザイン助手)
梁玉恬(共通教育助手)
三輪彩音(日本画助手)
奥村彰一(日本画助手)
堀龍太(油画助手)
岡田育美(版画助手)
野崎優里(版画助手)
西村卓(彫刻助手)
森川裕也(工芸助手)
伊藤圭吾(グラフィックデザイン助手)
島山耀太(グラフィックデザイン助手)
橋村実里(グラフィックデザイン助手)
山田みのり(グラフィックデザイン助手)
鷲尾恵一(グラフィックデザイン助手)
若本海(プロダクトデザイン助手)

小井沼桃(プロダクトデザイン副手)
松井萌真(テキスタイルデザイン副手)
北野美希(環境デザイン副手)
本園剛(環境デザイン副手)
安田萌音(環境デザイン副手)
佐藤美乃里(情報デザイン副手)
鈴木結実菜(情報デザイン副手)
岡本絢子(情報デザイン副手)
空閑美帆(芸術副手)
石川晶子(統合デザイン副手)
土田寛也(統合デザイン副手)
小沼あみ(演劇舞踊デザイン副手)
杉山ゆう(共通教育副手)
林晃司(共通教育副手)
柏崎みどり(共通教育副手)

大学院

堤涼子(助手)

総合企画室

宮下英一 室長 [写真]



渡辺十和 常勤嘱託

附属メディアセンター

若林亮二 主事補 [写真]
齋藤典子 常勤嘱託
山本恵海 常勤嘱託



入学センター入試課

本真澄 書記 [写真]



研究支援部研究支援課

長井佑馬 書記 [写真]
原衣代果 常勤嘱託



生涯学習センター事務部

小泉篤士 常勤嘱託
(以上、2017年4月1日付)

教務部国際交流室

吉田玉青 常勤嘱託
(2017年5月1日付)

昇格

米谷ひろし 教授(環境デザイン)
森脇裕之 教授(情報デザイン)
安藤礼二 教授(芸術)
深津裕子 教授(共通教育)
木下京子 教授(共通教育)
佐賀一郎 准教授(グラフィックデザイン)
(以上、2017年4月1日付)

教務部長

安次富隆

学生部長

武田州左

附属美術館長

峯村敬明

附属メディアセンター所長

久保田晃弘

附属芸術人類学研究所

榎木野衣(所員)

名誉教授

萩原朔美

(以上、2017年4月1日付)

客員教授

美術学部

國司華子、八木幾朗(日本画)

安齊重男、長澤英俊、塩田純一(油画)

天野純治、河内成幸、小林裕児、
山本容子(版画)

青木野枝、須田悦弘、福永治(彫刻)

天野裕夫、安藤泉、武田厚、藤田政利
(工芸)

葛西薫、加藤久仁生、カリ・ビッポ、
菊竹雪、佐藤可土和、竹中直人、
津山克則、三浦武彦(グラフィックデザイン)

小倉ひろみ、川崎和男、
アウグスト・グリック、廣田尚子、
福市得雄、山中俊治(プロダクトデザイン)

新井淳一、新垣幸子、
クレア・ジョンストン、関島寿子、

益田文和、皆川明、皆川魔鬼子、
ジャック・レノー・ラーセン
(テキスタイルデザイン)

伊東豊雄、団琢磨喜、中村好文、
廣村正彰、藤江和子(環境デザイン)

伊藤俊治、上田壮一、小林章、坂根厳夫、
四方幸子、西山浩平、厩本純一
(情報デザイン)

菊地信義、酒井忠康、高萩宏、
田窪恭治(芸術)

大学院

馬越順子、横尾忠則
(以上、2017年4月1日付)

理事退任

萩原朔美

(2017年3月31日付)

評議員退任

萩原朔美

(2017年3月31日付)

2017年度入試結果

2017年度も各入学試験を経て、美術学部1,118名(うち3年次編入学18名)、大学院126名が入学しました。
また、当年度からは美術学部の全学科・専攻において推薦入学試験を実施しました。
本学では、変化の度合いを速めつつある社会環境にあって、文化芸術のさまざまな分野、さまざまな局面で活躍しうるバイタリティーに富んだ多様な人材を育成することを重要なミッションとして掲げてきました。入学者の選抜にあたっては、評価の尺度の多元性を重視していますが、この推薦入試はその意図をさらに先へと進めるものです。
その他、各入学試験結果は本学ウェブサイト上で公開しています。▶



推薦入学試験結果資料(推薦Ⅰ方式/推薦Ⅱ方式) (2016年11月実施)

学科・専攻・コース	志願者	受験者	合格者	入学者
絵画学科 日本画専攻	9	9	6	6
油画専攻	18	18	11	11
版画専攻	10	10	9	9
彫刻学科	5	5	5	5
工芸学科	22	22	13	13
グラフィックデザイン学科	182	182	21	21
生産デザイン学科 プロダクトデザイン専攻	51	51	14	14
テキスタイルデザイン専攻	26	26	8	8
環境デザイン学科	10	10	10	10
情報デザイン学科 (メディア芸術コース)	23	22	12	12
(情報デザインコース)	9	8	5	5
芸術学科	3	3	3	3
統合デザイン学科	12	12	6	6
演劇舞踊デザイン学科	43	43	24	24
(演劇舞踊コース)	14	14	14	14
(劇場美術デザインコース)	29	29	10	10
合計	414	413	142	142

※情報デザイン学科と演劇舞踊デザイン学科の各コースは内数

新刊



問い続けることが知性だ
遙かなる他者のためのデザイン
 一久保田晃弘の思索と実装
 久保田晃弘・著 (情報デザイン学科/教授)
 ビー・エヌ・エヌ新社 | 2月21日刊 | 本体2,600円+税

一体何が、これからのデザインや芸術になり得るのか。メディア・アーティストまた教育者として、人間中心主義から脱却することを志向しながら、工学から芸術へ、「設計」から「デザイン」へと展開した20年分のデザイン論集。

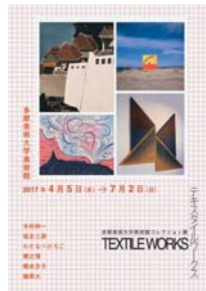
「わかることより、わからないことが尊い。いかにしてわからない状況を保ち続け、必死に考え続けるか。問い続けることが知性だと考えています」(久保田教授)



「混色」のコツをつかむ!
12色からはじめる 水彩画 混色の基本
 野村重存・著 (版画専攻/非常勤講師)
 大泉書店 | 4月17日刊 | 本体1,500円+税

本学の卒業生でもあり、TBS系バラエティー番組「プレバト!!」で水彩画の先生としても出演中の野村先生が、プロの混色技法を解説した一冊。

多摩美術大学美術館



多摩市落合1-33-1 | 10:00~18:00
 火曜休館 | 一般=300円 / 大・高校生=200円

4月5日[水]~7月2日[日]
多摩美術大学美術館コレクション展
「テキスタイルワークス」

本学ゆかりのテキスタイル作品によるコレクション展です。



アキバタマビ21

タマビが運営する新しい創造の場 3331 Arts Chiyoda内にあるアキバタマビ21は、若いアーティストたちが展覧会を行うスペースです。卒業後のキャリア形成支援を目的としており、企画から広報物・アーカイブ作成まで自らがける自己プロデュースによる企画展を年間約8回開催しています。

千代田区外神田6-11-14 2F | 12:00~19:00(金・土は20:00まで) | 火曜休場 | 入場無料



撮影=土田祐介

4月29日[土]~6月4日[日]
第60回展「光る知覚
——Touching the Light」

版画専攻卒業生を中心に、出身学科や大学もさまざまな4名の作家が美術作品としての照明のあり方を検証。

展覧会



環境デザイン | 伊東豊雄 客員教授
伊東豊雄展「新しいライフスタイルを大三島から考える」
 4月1日[土]~6月18日[日]
 LIXIL ギャラリー (中央区京橋3-6-18)



グラフィックデザイン | 上田義彦 教授
上田義彦 写真展「森の記憶」
 4月14日[金]~7月2日[日]
 Gallery 916 (港区海岸1-14-24)



萩原朔美 名誉教授
萩原朔美の仕事展 vol.1
 4月15日[土]~7月2日[日]
 前橋文学館 (前橋市千代田町3-12-10)



大学院 | 横尾忠則 客員教授
開館5周年記念展
ヨコオ・ワールド・ツアー
 4月15日[土]~8月20日[日]
 横尾忠則現代美術館 (神戸市灘区原田通3-8-30)



大学院 | 横尾忠則 客員教授
横尾忠則 HANGA JUNGLE 展
 4月22日[土]~6月18日[日]
 町田市立国際版画美術館 (町田市原町田4-28-1)



油画 | 日高理恵子 教授
日高理恵子 空と樹と
 4月22日[土]~11月30日[木]
 ヴァンジ彫刻庭園美術館 (静岡県長泉町東野クレマチスの丘347-1)
 同時開催=開館15周年記念展「生命の樹」 油画・村瀬恭子教授が出品



グラフィックデザイン | 佐藤直樹 教授
佐藤直樹個展
「秘境の東京、そこで生えている」
 4月30日[日]~6月11日[日]
 3331 Arts Chiyoda メインギャラリー
 (千代田区外神田6-11-14)



日本画 | 岡村桂三郎 教授
「北アルプス国際芸術祭」
 6月4日[日]~7月30日[日]
 長野県大町市



油画 | 菊地武彦 教授
菊地武彦展「線の形象」
 6月5日[月]~6月24日[土]
 Hideharu Fukasaku Gallery Roppongi
 (港区六本木7-8-9)



油画 | 菊地武彦 教授
菊地武彦展「土の記憶から」
 6月5日[月]~6月23日[金]
 f.e.i art gallery (横浜市西区楠町5-1)



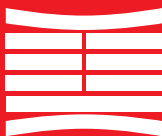
油画 | 菊地武彦 教授
菊地武彦展 2011 ~ 2017
 6月6日[火]~6月25日[日]
 FEI ART MUSEUM YOKOHAMA
 (横浜市神奈川区鶴屋町3-33-2)

表紙について

PBL「行為と記録2016」で試みた問題提起 来場者と対話してその内容を他者と共有したり、普段は彫刻制作を行う铸造室でハンバーガーをつくる、その行為を美術制作と重ね合わせた発表の場が、「行為と記録2016」だ。ものをつくって人に見せることに終始してしまいがちな作品展示と、その鑑賞のあり方に対する問題提起を試みている。年度末に学内で展示し、2017年4月のPBL成果展で発表した。(撮影=山下加代)



「TAMABI NEWS」では受賞や活動報告を募集しています。上野毛キャンパス本館1F(TEL=03-3702-1168 / e-mail=news@tamabi.ac.jp)までお知らせください。



最新情報は

www.tamabi.ac.jp

をご覧ください

多摩美術大学 広報「TAMABI NEWS」 2017年5月31日発行 第26巻 第1号 通巻73号

発行=多摩美術大学 東京都世田谷区上野毛3-15-34 電話=03-3702-1141(代表) 編集=広報誌編集委員会 総合企画室 デザイン=村松大彦 表紙撮影=山下加代

